

一四、最後の傑作

エリゼ・ルクリュは、その生涯の最後の十年間に於て、その健康状態動搖不安の中にありながら、なお無政府主義者として、また學者としての活動を些かも低減しなかつた。前にも述べたように新大學の講義に、各地に於ける講演に、彼の席の暖まる時間はなかつた。更に彼が同志の經營する新聞に雜誌に寄送した文章は夥だしい數に達した。しかもこうした諸種の勞作の中に於て彼はその生涯の大勞作に金黃の冠を着けるべく、否むしろ最後の解説と結論とを付すべく、一大傑作を後世に遺した。『人間と地球』(L'Homme et la terre) 六卷の大冊が即ちそれである。彼が此の著作を書き終つたのは、一九〇三年の末であつた。しかし常に完成を希求する彼はなお満足するに至らずして、その大部の書を反讀修正したらしかつた。一九〇四年の初頭に、彼が友人に書き送つた手紙中に、次の如き一節がある。

「僕は僕の本を書き終つた。しかし、それは一旦終つたので、また始めなければならぬ。言葉

をかえて言えば、それを修正し、それを完成し、友人達の批判を豫見して、それに應合せねばならない。今僕のしている仕事はそれだ。四千五百頁のこの諸雜の文中には、君の送つてくれた抜摘文(マキャベリの文……右川)のように斷乎たる、明確なる、客觀的な語句は、一句も存在しないかも知れないが、しかし、君が僕の文章を読んできたなら、恐らくは、人間的溫かさや些かより多く感じられることであらう。そして、それは決して忌むべきことでもないと思う」

こうして此の大著作は脱稿されたが、さて、その出版の問題に就て不愉快なことが起つた。それは、前の『世界新地理』の大出版で蔵を建てたアシエツト書店が、その續編、結論とも見るべき、此の書の出版を拒否したことで、その理由がまた實に、此の書は無政府主義を結論とする故に引受け難しというにあつた。かくてパリよりも先きにロンドンに於て出版者が見出され、フランス版が出はじめたのは一九〇五年四月のことであつた。それに愈々出版の段どりになると、それはルクリュにとつて楽しみというよりは寧ろ悲しみの種になつた。というのは、その出版者がただ商賣の利益ということにのみ關心して、書物に些かの愛情をも持たない人だつたからである。しかし、とも角も、この書の第一分冊が一九〇五年四月十五日に發行され、同時に露語譯とスペイン語譯(近代學校で有名なフランシスコ・フェレルの譯)とが出され、彼は最後にロシヤ語版へ

の序文を書いた。佛語版の序には次の如く言っている。

「數年以前、『世界新地理學』という長い仕事の最後の行を書いた後、私は、何時か、地球上の諸地方で觀察したような諸時代變遷上に於ける『人』を研究し、私の到達した社會學的結論を確立して見たい、という願望を表明した。私は新しい書物のプランを立てた。それは土壤だの、氣候だの、すべて歴史の出來事が成就された全環境の狀況が展示され、『人』と『地』との協調が表現され、民衆の行動が大地の進化との調和的因果關係に於て説明されるようなプランである。

本書は即ち、いま私が讀者に提供するそれなのである。

勿論、私は初めから知っている。どんな探究も、私をして人類進歩の法則を發見せしめず、却てその眩惑的な昼氣樓は絶えずわれわれの視野に動き立ち、そしてなお再現するために吾々から逃れて消えて了うことを。自分達の起源も運命も何も知らず。自分達が果して唯一の種族に屬するか、或は幾種もの人類が相次で消滅しては再生するように生れたものか、をも知らないで、無限の空間の中の一點として出現した吾々が、その不明な茫漠たる進化に、精密にして確定的な形式を與えようという希望で、その諸法則を規定するということは、無法というべき

であろう。

だがしかしながら、少なくとも吾々は、暗黒なる過去の中に考古學者の發見が絶えず延長されて行く長い世紀の道筋に於て、人間的事實の連續を地的諸勢力の作用に結び付ける緊密な關係を認めることができる。即ち、吾々は、環境の變化に應合する諸民族の生活の各時代を時間の中に追及し、自然と人間そのものとの結合せる作用——それを形成した『地』の上に反動するところの——を觀察することができる。

地球のあらゆる風景を靜觀すると、その無限の種々相や、常に活動している人種的諸勢力の作用がそれに與える調和や、に深く感動させられるものであるが、それと同じ風味は、幸または不幸の衣を纏うた、しかし總て同様に『地』（人間を支え且つ養うところの）や、天（人間を照しまたそれを宇宙の勢力に協合させるところの）と調和的ディブラシヨンの状態にある人間の行列を見ても感じられることである。そして、諸地方の外貌は、吾々が全我全力を傾けて讚美する美的風光を限りなく吾々の前に展開するが、それと同様に、歴史の經過は、その諸事件の連續の中に驚くべき偉大な場面を吾々に示し、それを研究し認識することに於て、人は自ら偉さを感じる。歴史的地理は、凡そ想像が喚起し得るすべてのものを、比類なきドラマに、莊嚴

なる現實に集中する。

社會がさしも深刻な動搖の中にあり、進化の動きが迅速になつて、眩惑せる人間はその生活方針を樹てる爲に新しい立脚點を探し求めるといふ、危機の尖鋭化する吾々の時代に於ては、歴史の研究は、絶えず擴張されるその領域が、益々豊富にして益々多趣な實例を提供するに従つて、益々高い利益を與えるものである。諸時代の連續は、吾々にとつて一大學校となり、その諸教訓は吾々の精神の前に自ら分類を生じ、そして遂には根本的法則に於て集合するやうにさへなるものである云々」

エリゼ・ルクリュの序文はまだ續くのであるが、以上に於て、その著『人と地』の創作意思は自ら察知し得るであらう。これは眞實の意味の社會學であり、歴史學であり、また人類生活の聖書であるとも言えるであらう。

一五、彼の死

一九〇四年一月、ルクリュ家の總領にしてエリゼとは影の形に添うが如くに添うていた兄のエリイが白耳義ブリュッセル市に於て逝去した。その翌年、即ち一九〇五年四月十五日に其の最後の大著『地人論』(L'Homme et la terre) 分冊第一號が出版された。暫くして七月四日、彼は其の異常なる大勞作の生涯を終るべく最後の呼吸を引いた。丁度其れは露國に革命運動が勃發した時であつた。そして彼が最後まで忘れることの出来なかつたことも其の革命の成敗如何にあつた。彼が最後の呼吸を引くに當つて其の唇端から漏らした一語は、『革命だ！ ホラ革命だ！』であつた。『彼の遺骸は、彼の遺言に基いて、甥のポール・ルクリュがただ一人でブリュッセル市イタセル區の墓地に伴つた。そのことはポールがクロボトキンに書き送つた通信に記してあるから、左にその全部を譯出する。』

白耳義ブリュッセルのボール・ルクリュがロンドンのクロボトキンに送った手紙

一九〇五年七月六日、イクセルにて。

親愛なる友、今日という日が暮れないうちに、たとえひと言でも貴方に書きおくりたい。三週間前から、吾等の友は急に衰弱を加え、発作もずつと屢々起るようになった。その前は、吾々は、高低はあるにしても、もつと長くこのままの状態がつづくものと思つていた。危篤になつてからの吾々の位置は非常に困難であつた。というのは無頓着な人々の訪問が彼に発作を——嫌悪のためとも言わうか——起させたのである。しかし友人達の訪問は、なお一層彼を感動せしめ、殆んどきまつて苦しい病の發作に彼を沈めるのであつた。私が最後に彼に會つたのはいまから八日前だが……

土曜日に、彼は弟のボールと妹のルイズの前で、自分の葬式には、誰も、たとえ弟妹でも、從いて來てはならないと命じた。何故なら弟妹が若し從いて來れば、他の友達もみんなそうしたがるだらうから。ボール（弟のボールに非ず、甥のボール即ち此の手紙の筆者……石川）が一人で俺を墓地につれて行つてくれ」と言つた。だから今朝の八時に、私は全く一人つきりで、吾等の友を埋葬しに行つた。（ブ府イクセルの墓地）物見高い見物人は少なかつた。餘りに早朝だつたから。そ

してエリゼの希望は文字通り、彼が考えた通りに行われた。

彼の最後の幸福の瞬間は、月曜日の、臨終の前に、ロシヤからの電報を読んできかせて貰つたことであつた（クニヤス・ボテムキン「號の水兵の叛逆の報……石川」）彼が最後に仕上げた仕事は「地人論」のロシヤ語版（レベデフ譯）のために序文を書いたことであつた。しかし土曜日まで、彼は自分の著書のために、少しづつ注意事項を口述することが出来た。

友愛を以て、

ボール・ルクリュ

エリゼには十人の兄弟があつた。兄のエリイに就ては今改めて言わない。エリゼは次男であつた。三男オネジムは地理を美文で書いた人として有名である。末弟のボールは外科醫として佛國第一人者と稱せられた人、最後に加うべきは四男アルマンという人である。此の人は海軍士官であつて獨り此の家族に不似合な百萬長者になつた。この外に六人の妹があつたが、今日は最年少の妹が一人残つて居る。六人の婦人は何れも皆博學多才の人々ばかりであつた。

一六、學者としてのルクリュ兄弟

學者としてのエリゼ及びその兄エリイに就ては多くの人が既に論じている。社會經濟學の泰斗ド・グレフの如き、博識・綿密なる近代社會史論家として有名なネットラウの如き、いずれもルクリュ兄弟の眞の學者的風貌を顯揚して餘すところがない。私は先ずここに少し毛色の變つた、現代的桶仙人の綽名あるアン・リネールの講演（エリゼ・ルクリュと題する）中より數節を摘録する。

x

x

x

學者としてのエリゼ・ルクリュの勞作は第一級のものである。素よりあの巨大な書冊をしかも多數重ねた著作中には、多少の誤謬も稀れには發見されるであらう。しかし彼の良心はそれを極めて稀有にし、その莫大な文献の検討は彼の精確な批評的精神が常に注がれた。更に彼が集めた報道の正確さと、その事實の驚くべき多數さ、殊に彼に於て讚美すべきは、その生命の感覺、物の

複雑性に對する慧智であり、制約の精神に對抗して常に彼を保護するところの思想の柔軟性開放性である。その思想の豊富さと同時に方式の單純さは常にそれを躍動せしめると同時にそれを精確にし科學的にする。彼が同時代の人コルタンベールに對して言うた言葉は決して非難すべきではない。即ち彼は言う「コルタンベールの地理學は、全然生命の感情を缺いていると私には思える。大地は礦物性のもの、都市は張子のようなもの、人間は紙筒のようもので、それは著者がその書に於て一語を變更してもならないものであらう」彼は強力にして柔軟な綜合的方法を持つに係わらず、「感激に依らないで方法に依つて學ぶ」ところの總ての人を些か誇張の語を以て輕蔑する。彼は所謂階級の書は、「科學を既成の承認せられた事實、花押のようなものとなし、殆ど一種の宗教となり、迷信に變じつつある」ものとして之を憎惡する。そして言う「これは死んだ食物であり、人を殺すものである」と。これに反して彼は生きていて、讀者を生かし、讀者の生活を豊富にする。彼は決して忘れない、生命は複雑なものであつて、その調和には饒多な富を必要とすることを。「植物がその總ての毛根により、また葉の毛孔によつて遠いところから榮養を吸収するように、地理學もまた宇宙學や、物象學や、歴史、地誌を同時に始めなければならぬ。周圍の自然は、その全無限の中に現わされた無邊の綜合なので、決して部分による部分では

ない……兒童等がその全感覺を用いて、漸次に周圍のすべてを知得するのは、こうしてである」『世界地理學』に於ても、またその傑作であろうところの『人と大地』に於ても、彼は決して抽象化し單純化する必要のために犠牲を拂わない。秘藏する彼の藝術は綜合的容相を簡明ならしむるに充分である。彼は胴振いする生命の上に溢れるばかりの光明を授けるのである。彼は決して吾々に分析的、分割的、統計的な偽物を呈供しない。常に綜合的、力學的な、豊富にして浮動する鳩の羽色のように波形にニュアンスされた眞實をわれわれに與える。

彼の著作中の或るものは、それが私を感動せしめること寧ろ多大であるのに、私には餘り好きになれない。その著作に於ては、彼の精神がハートに支配され、彼の慈愛心が彼の美學の又は知識的天性の必要を犠牲にしたのである。前段に於て彼が定義したところの力學的綜合には餘裕が必要である。微笑ましい素振や、外觀的には氣儘と見られるような自由が必要である。その綜合には急速さや緊肅さを不適當とする。エリゼ・ルクリュは、或る時代に於ては、彼の書物が餘りに大きく、高價なので、彼が負めある如く感ずる眞の生産者たる貧しき人々が、これを購うべき金を有たず、圖書館に行つて勉強すべき時間をも有たないことを、いたく憂えた。資産の乏しい學校や、貧困の少年達や、獨學者達やに對する彼の優情は、彼をしてあの立派な『地』を小さな

二卷の廉價版にしようと決心せしめた。この感動すべき努力は最も不幸な境地に於て表示された。即ち彼は監獄に投じられたのである。富者に與えるより少なく貧者に與えることは彼の好まないところ、廣大な宮殿内に於けると同様な富を狭い小屋の内に積み重ねた。少ないページに餘りに多くの事を。遂にこの書は知識人には難讀のものとなり、他の人々には不讀のものとなつた。善意の過剰は企圖を裏切つたのである。その試みの道德的善意を讚美しよう。その親切心によつて不可能の勞作を企圖したところのエリゼ・ルクリュを崇敬しよう。

× × ×

以上は今様ディオゲネスと言われるアン・リネールの講演の一節である。アン・リネールは暴力問題に就てエリゼの態度に些かの批評を加えている(別掲エリゼ・ルクリュと暴力問題の項参照)が、それ以外に於ては絶大の讃辭頌語を以て彼を論じている。エリゼは良き知己を得たりといふべきである。

次の一文はエリゼの甥でその事業の承繼者たるポール・ルクリュが『種蒔く人』(Le Semeur)のルクリュ號に寄せたもので、『ルクリュ兄弟の學問の價值』と題し、多くの示唆に富むが故に茲にその全文を掲げる。

所謂「自然地理學」は、エリゼ・ルクリュがその最初の本を書いた時代から見れば長足の進歩を來している。五十年後の同種の書籍類に比較すると「地」(一八六八年)はどうも幼稚な處を持つている。そして教科書としては使用出來ないだろう。しかしながら後になつて誤謬であると認められた個處は極めて僅かしかないことも言つておかなくてはならない。エリゼは殆んど應用地質學を知らなかつた。そして彼は自然の内部の骨格まで、究めるには餘りに外面の風光美に感動し過ぎた。だが私の知つてゐる限りでは、彼は決して踏査をやつたことがない。この問題で彼が知つてゐたことは、彼自身實驗したことではなくて、讀書に負う處の知識である。

それだからこそ、彼が外面現象に關する、精確な完全な研究を仕上げることが出來たのかも知れない。彼の腦髓が眞に消化した知識を以つて、彼は「新世界地理學」の中に、十九世紀末葉に於ける地と人間との繪畫を組立てることが出來たのだ。それから彼は「地と人」との過去の研究に着手することが出來た。二十年以來、地球に關する多くの一般的記述が現われ或は現われ始めた。しかしながら問題が餘り廣漠としすぎて、これが編纂に當つては、問題と著述者とを分けなければならぬ。これ等の著書は——勿論、多くの細部に互つては完全であらうが——統一を缺

き驚ろくべき脱漏を示している。ヴァロオ氏(Vallaux)は最近メルキユール・ド・フランス(Mercure de France)誌上でこれ等の缺陷の一つを指摘して言つた。「偉大なるルクリュはこの誤謬を犯さなかつた」と。これ等の地理學は異つた國々に關する優れた研究を集めたものであるが、エリゼの地理學は全篇を通じて共通點のある綜合的展望である。

エリゼ・ルクリュは専門家でなかつたので非常に幸福であつた。彼は資料を集めることをよく知つていて、自分の全能力をこれに用いた。文學者として、自然の觀察者として、既成秩序の蔑視者としての彼は、同時にまた地理學者であつて、彼の地理書は萬人が専門的な知識を持たないでも愉快に讀み得るものである。彼は地球や、陸や、大氣や、水を見た。彼は到る處にうごめいてゐる生命を見た。彼は人間とその熱情とを見た。そして殊に、そうしたものの凡ての靜止的狀態を見たと同時に、彼はまた、いろいろな力が常にそれ等の一時的形貌を變えようとしてゐることも忘れなかつた。彼は彼の最極の思想にまで達してゐた。そして彼の七絃琴のどの絃をも弄びすぎはしなかつた。

エリイ・ルクリュの土俗學と宗教學に關しては、もつと簡單に言える。彼はロマンチックで、夢想家であつた。思想家と言ひ得るかどうか？ 正確な生物學的な諸科學に精通し、次第よりも

もつと専門的でない彼は、あらゆる特異事實を、一般進化の廣い綜合の中に配置した。只彼はこれを骨折つて書いた。あそこからも、ここからも、彼はその内部構造の一小面を中心物體をほのかに示す處の小畫面を、發見して、その周圍に哲學的考察を集めた。どの研究も讀者の鋭敏性に委ねられる世界であつた。それからエリイは資料調査に没頭した。——彼は夢中になつて註釋を書き込み乍ら讀んだ——そしてまた人間進化の夢に耽つた。一八八〇年に追放を赦されて歸國するや、人類學協會に入會した。「當時、誰一人として、私が述べたある意見に賛成した人はなかつた。だが十年後にはみんなが私の意見に一致した」とある日彼が私に話したことがある。それは彼自身の單なる經驗談であつたので、彼は些も、自分の意見が誰かを克服したなどと主張したのではない。彼に従えば思想の進化は、個人が十分意識しない處の法則に従う。それを、ある時は甲、他の時は乙によつて表現するのは人間の集團である。一八八五年の「原始民族」は、それより十五年後に出たレヴィー・ブリュル (Lévy Bruhl) の諸著書と同じ意見を包含してゐると、私には思われる。

エリイは當時の知識に従つてあらゆる事物の精髓を「了解」していた。またあらゆる知識の相關々係をも知つていた。そして彼は、他の人々に對して、何か教えようとするには、餘りに他の

人々の智慧を尊重しすぎた。彼が近代社會に於て學者顔をしなかつたのは、絶對的にロジック（當然）である。